高倉昔ばなし芝居

高倉郷土芸能保存会
平成二十一年二月一日
公民館芸能発表会於

十三番　観音堂建立記之二

解説

高倉寺五世白翁亮清和尚と高倉の村人の熱意が実を結び白子村長念寺より観音堂を貰い受ける事が決まりいろいろと話も進みまず先立つ物の金銭集めをと、各村々へ勧進を願う事になり各名主宅へお願いし其の趣旨の書いてある勧進帳を和尚と名主で配って歩いた。
この江戸時代後半は神仏への信仰が篤く暮らしも豊かで勧進建立の協力も得られていた。
予算が立つと早速古材の引取りが始まり各道筋の村々の協力を得る村送りと云う法式で行われた。
時に寛保元年　一七四一年今から二六八年も昔のことであった。

ニンバ　開幕

亮　清　「これはこれは村の衆、忙しゅうに度々ご苦労でござる。では名主殿よろしゅうにお頼み申す。」

名　主　「へえへえさあみんなあ、そう云う訳だいろいろ忙しかんべえが坊様の頼みだあ、みんなでうんまく打合わせてみてくんなあ。じゃあ先ず源さんあたりからおっ始めてくれやあ。」

源ェ門　「へえへえ打合せですかい、さあみんなで打合せんだとよ。　じゃあ清さんいくぞう　ウンショ　ウンショ　――――　――――。」

名主　「これこれ源さんふざけてんじゃねえ打合せちゅうは話ええのこんだんべやまじめにやれやーい。」

源エ門　「うんさて、まじめにいぐべえ、先ず今だあ宮大工うだんに頼むかっちゅうことからだんべえなあ。
　あんつったって古材を運んで見てたまげたあ、いかにいら細っけえのがいらあるってよう、ありゃあ到底長念寺でおっ外した大工でなくっちゃあ組立つめえよう」

清吉　「なるほど源さんの云う通りだあ、今一回長念寺へ行って何処の大工だか教(おせ)えて貰って来るよりしょうがんめえよ」

亮清　「では度々すまないが源エ門殿、清吉殿、平蔵殿　又行って聞いて来て貰いたい、今度は魚釣りなしでお頼み申うしますぞ　ハハ　丶丶丶丶丶」

三人　「魚釣りなしか　ハハ　丶丶丶丶丶」

ニンバ　閉幕

ニンバ　開幕

源エ門　「さあ揃ったな、坊様もこきゃあがるなあ、魚釣りや抜きだとよう
　エヘ丶丶　さあてでかけるかあー」

清吉　「まあ元気良く行ってくべえやそれーえ」

平蔵　さてー　西の赤坂ひとっとびで越えりゃっと
笹井の渡しもひとまたぎってか
中山街道からっ風　も早ついたよ白子村っと
長念寺和尚に大工を問えば　大工の名前がむずかしい
聞けば聞く程わからねえ　ああ　わからねえ　わからねえ

源ェ門　「坊様あ幾度教っても訳んねえ今一回だけ教(おせ)えてくんなあ」

長　「よいですかな　よく聞いて下されよ
先ず一人は　武州高麗郡真野村
小川市衛門藤原の勝義殿じゃ
もう一人は　同じく武州永田村
森澄久四郎藤原の守永殿じゃ
どうじゃ今度はいくら何でもお訳りだな。」

源ェ門　「とんでもねえこってチンプンカンプンでだめだあ　清さん頼まあ」

長　「ではこちら様はお訳りかな」

清　吉　「うーん　前の人が訳んねえですい」

長　「じゃあ　後の人は」

清　吉　「後なんかなお訳んねえ　平さん頼まあ」

長　「ではこちら様　如何かな」

平　蔵　「同じく全々まるっきり」

長　「仕方がございませんなあ　ではわしが一筆したためて進んぜよう」

源エ門　「是非お願え申します　大助かりですい」

長　「はい　無くしなさんなよう」

源エ門　「早えなあ　まるで書いといたみてえだなあ
どうも有難うごぜえました
ではこれでごめんくらっしえ」

長は背伸びで見送る

長　「度々ご苦労でした　気をつけて行きなせえよ
書き付を落としなさんなよー　魚釣りはだめですよー
無事に帰んなせえよー」

ニンバ　閉幕

ニンバ　開幕

源エ門　「ああ　今帰(けえ)った　何(あん)とか無事ついた」

名　主　「あれえ　もう帰(けえ)って来たか　ずい分早かったなあ」

清　吉　「あにしろ魚釣り抜きで帰(けえ)って来たかんなあ　今(こん)だあ狐に化かされなかったかんなあ　だけんど全くあん時あ魚と石っころと全部とっけえらいちゃったかんなあ」

平　蔵　「ふんとうだーい　化かされてよう　牛沢から上広瀬まで連いていかれたかんな、まったくめえましかったあ。こんだ狐のちきしょうをめっけたら石っころをいっぺえ持たせちまってなあみんなで狐のやろうざまあ見ろっってやんべえっただあ」

名　主　「平さん　わかった、わかった　所で大工は何処の誰べえだとよう」

平　蔵　「そっそっそれが名主様あ幾度聞いても訳かんねえむずかしい名めえだあ源さん　頼まあ」

源エ門　「はいよ　はいよ　おらあ　あらかた訳ったけんどよう念のために一筆したためて貰ってきたーい　あれ　あれー」

ふところに手をいれたが紙が無い　ぐるぐる廻る清吉、平蔵も「ねえか　ねえか」とさわる

清　吉　「ここに有るようだで背中のまん中だあ」

源エ門　「ああ良かったふんとうはおんにも大工の名は全々訳かんなかったよう」

名主　受取り高らかに読み上げる

名　主　「まあ　ご苦労ご苦労　さあさあ休んでくんな
一杯やってくんな　坊様あ　宮大工が訳っちゃあ明日にも頼みい行くべえかい」

亮　清　「はあ　はあ　名主殿　今度は私も行きましょう　行ってしっかりお願いして参ろう　さあやって下され」

ニンバ　閉幕

ニンバ　開幕

名　主　「坊様　じゃあ出かけますかい　どうぞ乗って下せえ」

亮　清　「やや　馬を用意下されたか、かたじけないが名主殿に馬子をさせて歳下の私が乗るわけには参らぬ　どうぞ名主殿お乗り下され」

亮清　軽々と名主を馬に乗せハイドウで出発

名　主　「坊様　坊様　とんでもねえ坊様に馬を引かせちゃあバチが当たってしまいまさあ下して下せえ　下して下せえ」

亮　清　「小諸出て見りゃ浅間の山に　ハイドウ　ハイドウ
今朝も三筋の煙が立つ　ハイドウ　ハイドウ」

ニンバ　閉幕

解　説

黒須の蓮華院の観音堂に勧進帳が残っている。
各村々の中の高倉の欄に本村六十六名　東高倉村八名　合計　金　四両一分四七八文　とあり一人当たり　二三〇文　約一日の日当位と思われる。
又、氷川神社の棟札に　金五両　江戸四ツ谷御門外島屋源兵衛の名が一人だけあるのもうなずける。
今回は観音堂建立記の二をご覧いただきました。
ありがとうございました。

登場者　配役

高倉寺　五世　白翁亮清

長念寺　和尚

名主　政エ門

村人　源エ門

村人　清吉

村人　平蔵